

スイカ太郎

遠い昔のお話です。

大きな川のほとり、雪深い山里に、福原村ふくはらむらという集落がありました。

福原村はその名のとおり、豊かな大地と清らかな水のおかげで、動物たちも植物たちも、そしてもちろん人間も、みんな笑って暮らしている、福々しい里山でございました。ただひとつだけ困ったことには、

その村には「子ども」が一人もいませんでした。

「さて、こまったなあ、ばあちゃん」

「はて、こまったなあ、じいちゃん」

「このままでは、この村は、年寄りばかりになってしまう」

「んだなあ。せつかく耕した田んぼも畑も、継ぐ人がいねえんじゃあ、もとの原っぱに戻ってしまうなあ」

長老夫婦は毎日心配しておりました。

そして心配したとおり、村はあっという間に

じいちゃんとはあちゃんばかりになってしまいました。

長老は、なんとかしようと考えました。

そしてある日、旅人からこんな噂話うわさばなしを聞いたのです。

「なあ、ばあちゃん。つづ山越えた先の神社さ、お供えそなえしてあるお神酒みき飲むと、必ず身みじもるんだぞ」

「そなたは度たびづいど聞いたな、じいちゃん。みっそくそのお神酒もびろびろ行いく

「んだな。もらってきたら、この村で一番若い夫婦さ、飲ませっか」

「一番若いっていったって、もうすんのOだぞ」

「じゃーねーべ。ほわ、ほわ、行へんぞ。少くとも早い方がいい。おむすびいっぺ、じぎってけん」

長老夫婦は、背中におむすびをいっぱい背負って、神社を目指し歩きだしました。3日かかって、やっと神社にたどり着き、それからまた3日かかって、村まで戻ってきまうた。

「やはや、年寄りには、しんどい旅です。」

「のど渴いだなあ、ばあちゃん。これ、ちょべっと飲んでもいいんねが?」

「だめだ、じいちゃん! 家さ帰ったら、別の酒、いっぺ飲ませてやるがら、もう少しガマンしろな」

「ちょべっとだったらいいいべや」

「だめだって」

そうやって、ふたりはなんとか励まし合って歩きました。

最後の沢を降り、やっと懐かしいスイカ畑が見えてきました。

「ふう、いがったなあ、ばあちゃん。やっと帰ってきた」

「じいじいまだだっけなあ、じいちゃん。今日はいっぺ飲んでいいがらな
ふたりがほっと一息ついたそのときです。

マムシが一匹によろっと顔を出し、ばあちゃんの足をなめました。
じいじいしたばあちゃんも飛び上の井もこた。

飛び上ったばあちゃんを助けようと、じいちゃんも飛び上のります。

「これは神様がらの授かりものだべ」

「んだな、みんなで、大事に育てねばな」

スイカから生まれた男の子は、スイカ太郎と名付けられ、大事に、大事に、育てられました。

スイカ太郎は、長老夫婦の家に住んでいましたが、福原村みんなの子どもとして、村の人みんなに愛されました。

「スイカ太郎くん、今日はおらいさ、晩ごはん食べに来いな」

「うん、いってやる」

「んじゃあ、明日の朝は、うづわ来いよ」

「うん、いってやる」

すくすく、すくすく
すんすん、どがどが

スイカ太郎の体は、上にも横にもびていきます。

「スイカ太郎くん、沢ガニ捕まえてきたから、おらいさ食べにおいで」

「うん、いってやる」

「うちは、イノシシ捕まえてきたから、イノシシ鍋するよ」

「うん、食べでやる」

村のみんなが、かわりばんこに大事にするので、スイカ太郎はどんどんわがままになっていきました。

気に入らないことがあればすべ怒り、食べたいものはなんでも食べないと気がすみません。

人の畑の作物も、人の庭に実っている果物も、断りもなしに勝手に食べてしまします。

おまけに「ありがとう」を言いません。

長老夫婦は後悔うらみしていました。

さいしょに自分たちが甘やかしたせいで、スイカ太郎はこうなってしまったのだと、ひどく反省していました。

だから村の人にもお願いし、「これから厳まじしく育てようとしたのです。

「スイカ太郎をあまり甘やかさないでけろ」

「なしてや。」

「スイカ太郎のためにならねーべ」

「したって、いまなら厳まじしくなるといえるよ。めんじょさよ〜」

「ういが、おつと聞きいてけろ。わしは年輩ねんぱいのは、あの子よのすいぶん早く死んでしまっべ。こればかりは、順番しらべなもの。んでもよ、わしらがいなくなっ

ても、あの子はまだまだ生きていかなばなんねえ。そのときまで、一丁前いちぢょうぜんの人間

「育てねば、あの子が回かれぬしなとだ」

長者がいっしょうけんめいお願いしても、村の人はききません。

表向きは厳まじしくしますが、長者に隠かくれて甘やかしてしまっます。

むりもありません。

なんせ、村でたったひとりの子どものなです。

みんな回かれへていかたがなすのです。

そいつは月日は流れ、スイカ太郎はもう子どもとは呼よべないくらいに、大きな身体からだに成長せいじやうしてしまっだ。

なのに、いっしょに働はたらけようと思おもいません。

雨あめふるなか、曲まがった腰こしでみんなが田植いりえをしても、スイカ太郎はひとり畦し

に腰掛け、おむすびをかじりながら見えています。

あつついなか、汗を流してお年寄りとしよりが働いていても、スイカ太郎は木陰こかげで昼寝を
しています。

なまけもののスイカ太郎の身体は、ぶくぶく、ぶよぶよ、まるまるしています。

「スイカ太郎や、そんなんじゃあ、いつか好きな人ができたときに、嫌われてしま
うぞ」

「おれのことをきらいなやつなんか、いねーもん」

「はたらきもしない男のどこになんぞ、誰もコメこねーぞ」

「じいちゃんとはあちゃんがいれば、おれはいいもん」

長老夫婦はいつそう悩んでいました。

自分たちは先にいなくなるんだ、このままだと一人になってしまおうよ、
いくら言っかけてきかせても、スイカ太郎はのんきな返事を返すばかりです。

そうしている間にも、村のお年寄りたちは、ひとりへり、ふたりへり、
ついにはみんな亡くなってしまいました。

そして山桜の花が咲く頃、長老夫婦のばあちゃんも亡くなりました。

村には、長老とスイカ太郎の二人だけになってしまったのです。

「スイカ太郎や、わしがスイカをつくれるのも、きつとこれが最後だ。よおく見
ておくんだよ」

「最後なんて言っつなよ。おれのために、んーまいスイカ、ずっと作ってくれよ」
「そうしたいのは、やまやまだがな。誰にだって寿命じゆみってのがあるからなあ。

ぶつだ、最後べらい、じいちゃんの手伝いしてみねが？」

「んんー、ちよべっただけだぞ」

「おお、よっつよ」

長老は、うれしそうにスイカ畑を耕しました。

スイカ太郎は、ぜんぜん真面目な働き手ではありませんでしたが、それでも、いっしょに並んで農作業ができることを、長者は心から喜びました。

日に日に、お陽さまの力が大きくなってきました。

じりじりど、本格的に暑くなってきた、ある日のこと。

長者は、青々と茂ったスイカ畑の上に、ばたんとたおれてしまったのです。

「じいちゃん、どげした？ 寝たくなったのが？ まだ風間だよ」

「スイカ太郎や、わしもそろそろお迎えがきたらしい。おまえをひとりの残して、いのは本当に心配だよ」

「じゃあ、すっぴいじいちゃんをばささささ」

「そういうわけにはいかない。いいか、わしが死んだら、ばあちゃんと同じように穴をほってあげておくれ」

「ええー、あの味の上が？ あんな高いところまでのぼるの、やんだな」

「そんなこと言わずにや。ひとつぐらいいい、わしの頼みをちゃんと聞いてくれてやさん」

「んー」

「あそこからはな、この村が見渡せるんだ。ばあさんとふたりでお前を見守りたうんだよ」

「わがった」

「スイカ太郎や。お前は、なして、じいの村を生まれただけな」

「やー、おな、わがらいな」

「そろそろ、本当にお別れのようじゃ。……いいか、スイカ太郎。困ったことがあったら、わしとばあちゃんがお前に言ってきたことを、めっくら思い出すんじやん」

「なんだっけ。おれ、覚えてね」

「なあに、おまかっしんじいちゃんひしひしとさ。めっくら思い出すんじいちゃんひしひしや。おまかっしんじいちゃんひしひしとさ。めっくら思い出すんじいちゃんひしひしや」

「おな、おれなえよ」
「おれな。お前はさっしんじいちゃんただけなんだ」

「んだがなあ」

「んだよ。……大丈夫、生きていくための知恵は、もう、全部ここに入ってるがらな」

長者はそう言つと、スイカ太郎の胸を、とんとんと、たたきました。そして、そのままスイカ太郎の体にもたれかかると、眠るように目を閉じたのです。

「じいちゃん？ じいちゃん？ まだ、夜んねぞ？ 寝るなってば」

じいちゃんは動きません。

しかたなく、スイカ太郎も、じいちゃんにもたれかかりました。

「じいちゃん、そんなに眠たいのが。しょうがねえなあ」

そのまま、どのくらい時間がたったでしょう。

お陽さまが沈んで、あたりは真っ暗になり、お月さまが顔を出しました。

今度はお月さまが沈んで、お陽さまが顔を出しても、長者は目を覚ましません。

ずっと、じいちゃん、じいちゃんと呼び続けていたスイカ太郎は、ようやく、長者が死んだのだと理解しました。

「そっか、じいちゃん、死んだのが。よし、峠まで運ぶか。約束だもんな」

スイカ太郎は立ち上がり、長者をかつぎあげました。

「あれ、じいちゃん、意外と軽こいな」

ひょい、ひょいっと、坂道をのぼり、

ばあちゃんの眠る峠の場所まで辿り着くと、大きな穴をほりました。

そこに長老を横たえ、上から土をかけました。

長老の体がすっぽり見えなくなったころ、またお陽さまが沈みだしました。

「このあと、どーするんだっけ？ ーごうやって、手を合わせて・ナムナムナム
・ごうだっけ？ ・うてが、はらへったな」

スイカ太郎が何をしゃべっても、誰も何も答えてくれません。

ひとりぼっちなのだから、当たり前です。

スイカ太郎は、急に寂しくなりました。

自分がしゃべらないと、誰の声も聞こえないことに気付いたのです。

「おーい、誰かあー。だれかないのがー」

スイカ太郎が叫んでも、風がさわさわと鳴くばかりで、なんの返事も帰ってきません。

「だれかー、おれに食べるもの、けろー」

いつのまにか、あたりは真っ暗になっていました。

今日はお月さまも出ていません。

本当の、真っ暗です。

「あれ・つめて・目から水が出てきたぞ」

スイカ太郎の目から、ぽろぽろ、ぽろぽろ、水滴が落ちてきます。

それが涙だということを、スイカ太郎は知りませんでした。

悲しいと涙が出るということも、スイカ太郎は知りませんでした。

「こんなに水出できたら、のびかわへへよー。はらも入ったしよー。そうだ、おれも、じいちゃんとはあちゃんのとこへ行へへ」

スイカ太郎は、お墓に並んで寝ころびました。

このままじっと横になっていれば、自分もじいちゃんたちの所に行けるのだと思っただのです。

暗闇の中で、ぽろぽろ、ぽろぽろ、涙を流しながら、スイカ太郎は眠ってしまいました。

どのへらだったころでしょう。

スイカ太郎は、鳥たちの声で目が覚めました。

目を開けると、そこは夢なのか、現実なのか、薄もやの中でした。

「おれ・今どこさいるんだっけ？」

ぼけーっとしていると、地面がだんだん温かくなってきました。

目を凝らすと、遠くの地平線から、お陽さまが顔を出してくるのが見えます。

お陽さまは、だんだんに大きくなり、順番にあたりを照らしていきました。

葉っぱ、木々、小川、山々、田んぼ、峠道・スイカ太郎の顔。

スイカ太郎は、まぶしそうに目を細めます。

目の前には、美しい福原村が広がっていました。

じいちゃんと、ばあちゃんと、自分が住んでいた家も見えます。

一面のスイカ畑も広がっています。

スイカ畑には、小さな黄色い花が、いっぱい、いっぱい、咲いていました。

まるで、きれいな黄色いじゅうたんのようでした。

あの小さい花が落ちたら、今度は緑色の小さな実がなることを、スイカ太郎は

思い出しました。

小さな緑色の実は、どんどん、どんどん大きくなって、
最後は、あまーい汁が、いっぱいしまったスイカになるのです。
スイカ太郎のおなが、ぐうと鳴りました。

「はらへったな」

スイカ太郎は立ち上がりました。

そして、朝もやの峠道を、村に向かって歩き出しました。

村は本当に静かでした。

だあーれの声も聞こえません。

寂しくなったスイカ太郎は、自分を励ますように歌を歌ってみました。
でも、どんなに声を張り上げても、誰も褒めてくれないのです。

聞いてくれる人がいないと、歌ってもぜんぜん楽しくないのだと、スイカ太郎は
初めて知りました。

家へ帰ってきたスイカ太郎は、なにか食べるものを探しました。

考えたら、もうずっとずっと、なにも食べていません。

お腹と背中がくっつきそうなほど、へこぺこでした。

「はらへったあ。おむすび食いてえなあ」

流しを見回しても、お釜をのぞいても、おむすびはありません。

米びつのなかに、生米なまいちがあるだけです。

「いね、どしやって炊くんだけ」

スイカ太郎は、自分でご飯を炊いたことなど、一回もありませんでした。

じいちゃんが亡くなる前に教えてくれていたのですが、ぜんぜん真面目に聞いていなかったで、ほとんど覚えていないのです。仕方なく、スイカ太郎は生米をかじってみました。ぼそぼそとして、ぜんぜん美味しくありません。

やっぱり、がんばって自分で炊いてみよう・そう思ったときでした。

「おゝい、誰かいないかあ?」

どこからか、人の声が聞こえます。

スイカ太郎はびっくりし、うれしくなって戸を開けました。

すると、旅の一行が峠道を下ってくるのが見えました。

しんと静まり返った村に、お侍たちの声が響きます。

「おゝい、誰かいないかあ?」

旅の一行は、福原村の今は空き家になってしまった家々を、一軒一軒、のぞいて歩いているようでした。

先頭を歩くのは、ちょんまげ姿のお侍、その後ろを立派な籠かごがゆらゆらと進みます。たいそう立派なその籠を、男衆が宝物でも守るようにつくると囿こもっています。

「しゝゝ、あの中さ、いったい何が入ってるんだべな」

スイカ太郎は、ふらふらと表に出て、籠に近づき、中をのぞいてみました。そのときです。

スイカ太郎に気付いたお侍が、大きな声で怒鳴りました。

「無礼者!」

お侍に一喝され、スイカ太郎はしりもちをつきました。

生まれてからこれまで、一度たりともこんな風に叱られたことはないのです。いったい何が起こったのか、スイカ太郎はただただびっくりして、目をまん丸にしています。

「おぬしは何者だ？」

「なにもの、って、スイカ太郎だ」

「この村のものか？」

「んだ」

お侍はスイカ太郎から籠を遠ざけると、なおも問い詰めます。

「ここはなんという村だ？」

「福原村」

「ここに住んでいるのは、お前だけなのか？」

「んだ。じいちゃんも、ばあちゃんも、村の人も、みんな死んだ」

「なんと・これはどうしたものが」

お侍は顔をしかめて何やら考えているようです。

供の男衆と何やらひそひそ話しているすきに、スイカ太郎はまたもや籠に近づこうとしました。

でも、あと少しのところで見つかり、乱暴に引き離されてしまいました。

「まったく、油断もすきもないやつだ」

「その中、見せてくねでもいいべやー！ けちー」

「け、け、けちだどー！ 百姓の分際で、侍に向かってその言動・許せん、叩き切っちゃるー！」

お侍は長い刀を抜き、スイカ太郎の目の前に突き付けました。

スイカ太郎は恐れるどころか、きらきらと光る美しい刃を、指でなぞろうと手を

伸ばしたのです。

「ひゃああ、初めて見だ！　きれいなもんだなあ」

「おのれ、無礼者！　馬鹿にするのも大概にしろー！」

侍が刀を大きく振りかぶったとき、籠の中から女の声がありました。

「おやめなれど」

鈴の音のように澄んだ声に続き、籠の中から、紅色の着物をまとった女の人が見えたのです。

その姿たるや・・・
しやしやと輝く黒髪、雪のようになじり白な肌。

唇は、ぽつぽつとして春の蕾つぼみのようになじり可愛らしく、くび色の瞳を見れば吸い込まれてしまふほどです。

「・天女さま・」

スイカ太郎は、ぽけら〜と、口を開けたまま固まってしまいました。

「し、しや姫さまー！　籠の中にお戻りなれど」

お侍が慌てているのもおかまいなく、しや姫と呼ばれた姫君は、お侍とスイカ太郎の間に立ちました。

「刀を仕舞いなむら。そのお方は、そなたを茶化しているのでも、馬鹿にしてるのでもなさ。きつと田んぼがなれぬもの触れ、さうさうと戸惑っておるのや」

「さや、なか」

「いいから、早く物騒なものを仕舞いなさい」

「・はっ」

「さっさと食べるものを仕入れて、旅を急ぎ、お城に戻りましょう」

「ははあ〜」

家来をしっかりとつける凛々しい御姿を見て、スイカ太郎はため息をつき、「つやひめさま」と刻み付けるように唇を動かしました。

お侍は言われた通りに刀を収めると、スイカ太郎に向き直り、あらたまって声を掛けたのです。

「スイカ太郎とやら、すまなかった。われらは旅の途中なのだが、空腹での。何か食べるものを分けてもらえぬかこの村に寄ったのじゃ」

お侍の声が届いているのかいないのか、スイカ太郎は呆けたように姫君を見ているだけです。

「おい、聞いているのか、スイカ太郎。我らに何か食べ物を、そつだな、できればおむすびでも」

「おむすびー？ おれも、おれも！ おむすび食いてえー！」

突然、スイカ太郎が叫びます。

我に返ったように、空腹を思い出したのです。

「そ、そうか、そなたも食べたいか。ならばぜひ」

「おむすび、食うべ、食うべ！ なあなあ、米、炊いでけろ」

「な？！ そなたは米の炊き方も知らんのか？」

「へへへへ」

「へへへへではない！ まったく、どうやって生きているんだ」

「どうやってたべなあ」

真剣なのか、茶化しているのか、とぼけた顔のスイカ太郎にどう接すればよいか分からず、侍はじれじれしました。

そんなやり取りを見ていて、つや姫さまは笑っています。いつまでたっても話が曇り合わないので、お侍はさじを投げ、家来に命じて米を研ぎ、スイカ太郎の家のかまどを借りて炊き始めました。家の中にはご飯の炊けていく良い匂いが広がっていきます。

「なあ、おめがだは、どっから来たのや?」

「都だ」

「みやこ? ほだな地名、聞いたことねえなあ」

「ふん、田舎もんが」

「田舎もん? ほれは何や? 食べられるのが? なあ、なあ、教えてしろ」

「う、うるさい、いちいち聞くなー」

「腹減ったなあ。まだ炊げねえがなあ」

スイカ太郎を見て、つや姫がくすくすと笑います。

その微笑みの何と魅力的なこと。

スイカ太郎の体に電気が走ったようにビビッとまりました。

「つや姫さま・」

無理もありません。

スイカ太郎は生まれた時から今まで、シワシワのおじいちゃんやおばあちゃんただけ接してきたのです。

若い、しかもこんなきれいな女の人を見たのは生まれて初めてなんです。

「さあ、いご飯が炊けました! 少し冷ましたら、おむすびにして食べましょう」

「それ、おれ得意だ! おれやる!」

スイカ太郎の唯一の特技が、あつあつのご飯をおむすびにするんですよ。

ただ単に、冷めるまで待てないからできた特技です。

家来衆に、火傷するぞと止められても、スイカ太郎はききません。

両手に塩をたっぷり擦りつけ、熱々をぎゅっと握ります。

お侍の喉が、ぐぐりと鳴りました。

「あぢ、あぢ、あぢい」

スイカ太郎が手を真っ赤にして握ったおむすびを、いつものように自分の口に運ぼうとしたとき、つや姫さまと目が合いました。

スイカ太郎は少し迷ってから、おむすびを、まずはつや姫さまに差し出しました。

「まあ、ありがとうございます」

ありがとうございます・その言葉を聞いたとたん、スイカ太郎の胸が、きゅーんと音をたてました。

じいちゃんから、何度も、何度も、お説教された言葉。

・いいか、スイカ太郎や、人から優しくしてもらったら、必ず「ありがとうございます」と言うんだよ。そうしたら、言われたほうだけじゃなく、言った方も嬉しい気持ちになるんだ。

じいちゃんから説教されても、結局、スイカ太郎は一度もその言葉を口にしたことはありません。めんどくさいと思ったからです。

なのに今、目の前の美しい姫の口から、ありがとうございますが出てきたら、なんとも言えず、嬉しい気持ちになりました。

じいちゃんの言った通りだ・スイカ太郎にとって、これは大発見でした。

「美味しいわ、今まで食べたどんなご飯より、このおむすびが美味しいー!」

つや姫さまは、心から美味しそうに、スイカ太郎の握ったおむすびを齧っています。

スイカ太郎は、次に握ったおむすびを、お侍にあげました。お侍は「かたじけない」とつぶやき、頭を下げました。その姿を見て胸がきゅーんとなったので、これはお侍にとつてのありがたいのだと、スイカ太郎は思いました。

「これはうまい！ いやはや、驚いた！」

寝められて、スイカ太郎は胸がホカホカしました。

お腹はぺこぺこなのに、胸は温かいです。

不思議でした。

おむすびを握ってあげると、そのたびにお礼を言われ、真っ赤になった手を心配され、美味しい美味しいと言われます。

嬉しくて、胸がきゅーんとなって、スイカ太郎は夢中でおむすびを握ります。

そうして気が付くと、お釜の中はほとんど空になっていました。

スイカ太郎のお腹がぎゅるると大きな音で鳴りました。

「はい、これ。半分、食べて」

つや姫さまが、自分のおむすびを半分に割り、スイカ太郎に差し出したのです。

「あ ありがとう」

スイカ太郎の胸が、これまでで一番、温かくなりました。

分けてもらったおむすびは、とっても、とっても、美味しかったので、次におむすびを食べるときも、誰かと半分にして食べようとスイカ太郎は思いました。

スイカ太郎は、次に握ったおむすびを、お侍にあげました。お侍は「かたじけない」とつぶやき、頭を下げました。その姿を見て胸がぎゅーんとなったので、「これはお侍にとってのありがたいのだと、スイカ太郎は思いました。

「これはうまい！ いやはや、驚いた！」

褒められて、スイカ太郎は胸がホカホカしました。

お腹はぺこぺこなのに、胸は温かいのです。

不思議でした。

おむすびを握ってあげると、そのたびにお礼を言われ、真っ赤になった手を心配され、美味しい美味しいと言われます。

嬉しくて、胸がぎゅーんとなって、スイカ太郎は夢中でおむすびを握ります。

そうして気が付くと、お釜の中はほとんど空になっていました。

スイカ太郎のお腹がぎゅるると大きな音で鳴りました。

「はい、これ。半分、食べて」

つや姫さまが、自分のおむすびを半分に割り、スイカ太郎に差し出したのです。

「・あ・ありがとうございます」

スイカ太郎の胸が、これまでで一番、温かくなりました。

分けてもらったおむすびは、とっても、とっても、美味しかったので、次におむすびを食べるときも、誰かと半分にして食べようとスイカ太郎は思いました。

・今後の展開として